

編集後記

新潟県中学校教育研究会

理事長 佐藤 靖子

(新潟市立内野中学校 校長)



生きて働く学びへ

教室に対話のある学びの姿が本格的に戻って参りました。生徒の手元には当たり前のようにICT機器があり、画面を指さしながら自分の考えを述べ、他者の意見へ質問をしています。対話型の授業は、一人一人の異なった経験や知識を共有の財産として、具体的な事象から抽象的な概念の獲得、一般化、普遍化していく過程に意味があると考えます。昨年度から「授業情報誌Class」には、①目指す深い学びの姿 ②深い学びにいたるポイント・過程 ③指定研究報告が掲載されています。指定研究チームが提案した単元（題材）の様子を参考に、各教職員が目の前の生徒に合わせた自校化へとそれぞれが工夫し、毎日の授業や研修に使ってみたいくなるコンセプトで発刊しています。

今年度、新潟県中学校教育研究会は創設60周年を迎えました。創設50周年からの10年間の研究歩みについて辿るだけでも、新潟県教育は21世紀に求められている資質・能力の育成について真摯に応え、積み上げた歴史を感じます。「なぜ、新潟県の多くの中学生たちはFTを用いてスムーズに対話ができるのですか？」と他県の方々が驚くほど生徒にFTが定着したのは県内のどの地区、郡市中学校教育研究会でも教職員同士がFTで研修し合い、学び合う授業を創ってきたからだと思えます。教師の一斉講義型授業から生徒による「主体的・対話的で深い学び」への変革、内容中心から資質・能力中心へと大きく授業が変化しています。この間、新学習指導要の移行期間に入り、令和3年度の中学校全面実施時期においては、新型コロナウイルス感染症蔓延時期にあたり、感染予防に努めながら「学びを止めない」を合言葉に各教職員が創意工夫のもとで対話型授業を実践して参りました。「授業情報誌Class 第6号 2021」の別刊リーフレットには、県内各校で学びを止めない研究・研修や、人権意識を高くしながら密集・密接を避ける授業の様子、工夫あふれる総合的な学習や行事・諸活動が掲載され、頑張る生徒を支え挑戦し続ける教職員の姿に勇気を頂き、感動を覚えました。

いよいよパンデミックも収束しつつあります。GIGAスクール構想で教室環境も飛躍的に変わり、「個別最適な学び」「協働的な学び」の一体的な充実が図れるようになりました。生徒それぞれが課題解決者となれるよう教職員は学びを生きて働くものにしていく使命があります。

この度、創設60周年記念事業では、記念講演会講師に早稲田大学教職大学院教授田中博之様をお招きし、「深い学びのこれから」についてご講演いただき、本誌へも特別に寄稿を頂戴しております。繰り返しお読み頂いたり本研究会HPのオンデマンド配信をご覧頂いたりし、これからの時代に必要な学びを最大限に引き出せる授業づくりの参考にしていただければ幸いです。

新潟県中学校教育研究会は、2年間の指定研究推進事業と、その研究の成果を全会員に伝える「授業情報誌Class」の両輪でこれからも全県の授業を支えて参ります。

12月8日創設60周年にはご講演、また、本誌にご寄稿頂きました田中博之様をはじめ、指定研究に携わられた関係者の皆様と、本誌の編集にあたり、貴重な原稿をいただいた各全県部長・副部長・指定研究会各校の皆様、各研究推進委員の皆様、編集に携わった事務局に感謝を申し上げます。編集後記といたします。